

第1回総会・報告

去る5月30日(日)、前橋プラザ元気21に於いて、第1回総会が開催され、24名が出席しました。司会は針谷正紀さん、議長は坂本政道さんでした。以下議事の概要です。

これまで——2009年度、活動のまとめ

(富田運営委員長)

- 別表による09年度の活動紹介。(43回の運営委員会、新たな運営委員の加入で活気)
- “すなっぷ”の下仁田自然学校とシネマまえばし取材は地域に根ざした活動内容の広がりに。
- 長野で開催された第18回全国教育研究交流集会に運営委員7名が参加。我々の活動の指針に。
- 県教育委員会の傍聴も5年目、フォーラムの存在をアピール。フォーラム主催の学習会「教育委員会って何？」に現役の県教育委員が参加し、話し合いが豊かに。
- 部会も当初の5から11に、今年度発足した「表現活動部会」は、詩や群読を定期的に行い楽しむ。開店休業も含めさらなる活性化が課題。
- ニュースを4号発行。“書きたくなる”、“反応したくなる”を編集方針に、タイムリーな話題・情報を提供。対象も広げた。
- 「ぐんま教育のつどい2009」の教文専門委員、教研推進委員として協力共同。
- 「教育ネットワークぐんま」に事務局長を初めとして役員をだし県内教育共闘に尽力。
- フルカラーのリーフにより会員拡大に取り組んだ。(現在18名)。

質疑・応答

針谷さん・・・教員免許更新制(群大の方針も含め)と学力テストの全国状況について。
応答(山崎さん・群大准教授)・・・学力テストは自主参加校から採点時間をかけてやる価値があるのかという声も考えられる。免許更新については、選択講座は参加者のアンケートで評判がよかったので論議を続ける、6年制は4年生で教職に就き、5年～10年の中で資格をアップすることも考えているとの話も。近々中教審で始まるのでは。群大は、必修で320人募集し400人ちょっと応募。

これから——2010年度の方針

(富田運営委員長)

- 基本方針に“若者”を付け加える。(従来は子どもだけだった)
- どういう「学校づくり」をするのか、どういう「学力」をめざすのか実践と運動の中で具体化する。県や各地の教育委員会ウオッチングを強化し、「市民の手による教育改革」を模索。
- 部会のユニークな学習・文化活動の模索。
- 年4回のニュース、必要と要求に応じた、フィードバックのある紙面づくり。
- 教育現場や研究機関とのつながりを密接に。
- 今年度群馬で実施される「第19回全国教育研究交流集会」成功に向け、主体的・創造的に活動する。
- 紹介リーフを活用して300名会員に。
- 会員担当をおき会員との連絡や要求・実態把握に努める。

会計報告、監査報告、予算案含めて一括承認。

特別企画・講演報告

「下仁田自然学校と子どもたち——地域と歩んだ10年」

(下仁田自然学校校長・野村 哲さん)

自然学校の構想は‘夜中の飲み会’がきっかけ(先輩などの書籍を頂き「地学文献センター」づくり、交通が便利で地質環境のよい場所に子ども向けの学校をつくる)(1995年～96年) ➡ 場所探しと自然観察会(1996年～98年) ➡ 自然学校創設(1999年6月5日、色々な人間関係のお陰) ➡ 「くりっぺ」(月刊)の発行、組織づくり、行事の充実(講演、学習会、自然観察会、自然探検、地質・水質検査、出張教室、地質研究会・学生実習、地質見学会の援助、自然学校まつり、図書・文庫の刊行)、地学団体研究会総会の開催、地質案内板の設置(一基100万円)、➡ 下仁田ジオパークづくり開始 ➡ ジオパーク講演会、ジオサイト観察会、ジオパークを語る会などの開催。(地域住民が学習・研究・案内できる体制づくり、自然の恵みを町づくりに生かす構想+自然と人間のかかわり。) ➡ 下仁田町との協力関係始動(下仁田自然史館にジオパーク推進室設置(2010年4月)、博物館、ジオパーク推進センターをめざす、下仁田町内の地域交流(ジオサイト交流)。

課題は人材不足だが、大学生が1名地元に戻りたいと言っている。長い目で見たい。

質疑・意見・提案など

◆ 理科離れをどう考えるか、自然学校と地域の子供の科学教育のように見えるが真のネライは。自然学校と世界遺産との関係、地域と学校教育の実践が群馬にもあ

ったという認識を新たにした。

- ◆ フィールドワークが人の心を動かし興味・関心を引き出すことを知った。フィンランドの理科教育は地域に出て行くことを知ったが、日本では若い教員が経験していないので見通しが暗い。
- ◆ 群馬では35年間も地学の教員を採用しなかった、また若い教員は外国の論文を読んでパソコンいじってシミレーションすれば論文が書けると思っているといった現状がある。
- ◆ 下仁田ジオパークツアーをやればよい
- ◆ 群馬には地学の教員が5人位しかいない、教科書を終わらせる受験学力という圧力がかかる、クリッペも教えていない、生徒は身近な山の名前も知らない。
- ◆ 自然学校を構想するときジオパーク構想はあったのか、また渡良瀬・吾妻溪谷など他の地域は視野にあったのか。など

野村さんの応答 理科離れについて、理科教育はするが自然から離れているから子どもは嫌いになる。小学校から大学へと積み上げて行くのが良いが、大学は体験させないので一番だめ、従って若い教員はやろうとしない。現実には育ってゆく子どもがいるから何もしないわけにはゆかない、地域が盛り上がれば地学の先生をよこせと言う風になる(時間がかかるが)。



感想 ロマンあふれる実践に感動すると共に、この実践には教育文化フォーラムが求めるものの多くが内蔵されていると思いました。講演と質疑応答のつながりもあり、さらに深まりもありました。(文責：平井敏久)